

報 文

高校生のジェンダー平等意識と将来観に関する調査研究 ～共学進学校・別学進学校・職業科高校の比較を通して～

茂 木 輝 順*¹ 橋 本 紀 子*¹ 杉 田 真 衣*²
良 香 織*³

A Survey on the High School Student's Gender Equality Awareness and Views on Future Life: Through the Comparison among Co-education Academic High Schools Students, Single-sex Academic High Schools Students, Vocational High School Students

Terunori MOTEGI*¹, Noriko HASHIMOTO*¹, Mai SUGITA*²
and Kaori USHITORA*³

Questionnaire research was conducted on a group of public high schools in Saitama Prefecture, to clarify the level of gender equality awareness and future life view of the students. The object schools were one male academic high school, one female academic high school, two co-educational academic high schools, and two vocational high schools. We made a self-administered questionnaire and conducted it at each school, then we applied factor analysis to clarify the points identified as; "gender gaps in strong and weak subjects on entrance examination", "sex role", "desire to social and economic success", and "ORIZUMU (dropout from conservative life stage)". The following results were observed;

- 1) Male academic high school students had moderate "sex role" properties, and a strong "desire to social and economic success", and oriented to the conservative life stage in almost all subjects, so that "ORIZUMU" was hardly observed.
- 2) Female academic high school students have a future figure as an independent woman, so the "sex role" and "ORIZUMU" were not strong.
- 3) Male students in co-educational academic high school had moderate "sex role" properties, and a strong "ORIZUMU" feature because of feelings about the possibility of a new life stage.
- 4) Male students in the vocational high school had a high consciousness of "sex role" and a "desire to social and economic success" was also high. They intend to become a conservative life stage, however, the wrong employment environment awake them strong "ORIZUMU".
- 5) Female students in vocational high school could not image a future figure as an independent woman, so there was a tendency towards strong "ORIZUMU". They also had a slightly stronger "sex role".

I have confidence in this detailed research about the process of consciousness composition, in schools. For example, it is important and needs to be considered how to tell teachers about the problems in life stage and how it is felt by students. We should improve high school student's gender equality awareness, based on the type of school and consciousness of the students.

*¹ 教育学研究室, 女子栄養大学: Laboratory of Education, Kagawa Nutrition University

*² 金沢大学: Kanazawa University

*³ 宇都宮大学: Utsunomiya University

I. 緒 言

中学校と高等学校が中等教育を担う現在の学制は、第二次世界大戦後、発足したものである。それは、男子の教育のみを担う（旧制）中学校と女子のそれを担う高等女学校という、男女別が当然であった中等教育のあり様を大きく変容させた。公立の（新制）中学校は、一部の国立中学を除き男女共学として発足し、公立の高校も、日本の各地区に駐留していたアメリカ軍の軍政部の指導によって、大半が男女共学となっていった。しかし、軍政部の指導が必ずしも厳格ではなかった第9軍団下の東北・関東には、比較的多くの男女別学高校が存続した。

そのように、存続した東北・関東の男女別学高校も、90年代後半より2000年代にかけて、共学化が進んでいった。その背後には、①1989年の学習指導要領の改訂で、高等学校の「家庭一般」が選択必修となったことによる教育課程上の性差別の解消や、②1997年の男女雇用機会均等法の改正や1999年の男女共同参画社会基本法の成立などの法整備、③少子化による生徒数減に対応するための高校統廃合、などがある。

その結果、福島県では2003年に、宮城県では2010年に、すべての県立高校が男女共学制となった。山形県には男子校の山形南高校や女子校の山形北高校があるが、これらは男子・女子の入学者がいない実質男子校・実質女子校であり、岩手県の場合は、岩手県立盛岡第二高校が実質女子校で、制度的には両県の公立高校は共学である。秋田県には男子校はなく、数校残る女子校でも徐々に共学化が進められている。そのため、現在、公立の別学高校が集中的に存在しているのは、栃木・群馬・埼玉の北関東諸県のみであり、全国公立高校の98%以上が男女共学である¹⁾。

法制度上でも、2006年12月の教育基本法改訂によって「第5条 男女共学」が削除され、男女共学制は完成された感もある。しかし、その一方で、中高生に広まるデートDVや集団レイプ事件等、子どもたちの間に、ジェンダー平等意識や（本質主義的な男女特性論を超えた）対等平等な関係性が築かれていない現実が指摘されている²⁾。高校生のジェンダー平等意識については、荒井ら³⁾や佐々木ら⁴⁾が、男子より女子のほうが、ジェンダー平等意識が高いと報告している。加えて、若者の雇用環境、特に新規高卒者の就職環境は依然として厳しく⁵⁾、格差社会と指摘されるように、正規雇用と非正規雇用の格差がクローズアップされている。乾は、正規就職できない若者たちの挫折感や過剰な自己責任意識が生み出される危険性を指摘している⁶⁾。

高校生を取り巻く学校内外の問題状況は、高校生のジェンダー平等意識や将来観にどのような影響を与えているか、そこにはどんな課題があるか。このような問題意識から、公立の男女別学高校が残る埼玉県において、共学進学校・別学進学校・

職業科高校の高校生を対象に、質問紙調査を実施した。本研究の目的は高校生のジェンダー平等意識と将来観を、共学進学校・別学進学校・職業科高校の比較によって把握し、課題を見出すことである。

II. 方 法

1. 質問紙の作成

県立男女別学高校が共学に移行したばかりの2005年の福島県において、佐藤らが実施した「高校生の生活意識に関するアンケート」⁷⁾を参考にしながら、表1の通りの調査枠組みを作成し、回答者の背景（高校への満足度・高校卒業後の希望進路・結婚や結婚後の生活形態の希望・男女平等や家庭科で仕事や育児を学んだ経験）とジェンダー平等意識や将来観を明らかにするための質問紙を作成した。ジェンダー平等や共学制に関する教育史研究者や教育哲学者、進路指導に関する研究者、体育や家庭科の教科教育研究者、養護教諭など、プロジェクトメンバー12名（プロジェクト名は本論文の末尾に記載）によって質問項目の内容的妥当性が確保できるよう、検討を行い、質問紙を確定させた。

2. 質問紙の配付・回収方法

埼玉県の県立高校6校（男子校（進学校）1校、女子校（進学校）1校、共学校（進学校）2校、共学職業科高校2校）の協力を得た。調査は2009年12月から2010年3月に実施した。学校宛に質問紙を送付し、クラス担任など高校の教員が教室で生徒に質問紙を配付した。調査は無記名で実施し個人情報保護されること、調査は自由参加であること、回答済みの質問紙を高校の教員は決して見ないことなどを説明した「調査協力へのお願い」の文書を質問紙とともに配付し、高校の教員がこれを説明した。生徒が記入後、生徒自身が糊付けのできる封筒に入れ、厳封されたものを回収した。計1,733部配付し、1,732部回収した。

表1 調査枠組み

大項目	中項目	小項目	質問番号
基本属性		性別／学年／学科	問1-3
高校生活	学校生活	進学した理由	問4
		学校に満足しているか／その理由	問5-6
		現在もっている悩み・心配事	問19
ジェンダー	ジェンダー形成	高校生活でのジェンダー形成の場面	問7
		体育の男女共修・別修	問8-9
		家庭科の学習内容	問11
		性教育の学習機会	問12-13
	ジェンダー意識	男女共修・別修の意識	問10
		性別役割分業意識	問14
将来・進路	将来展望	将来展望に関わる意識	問15
		結婚や家庭生活の希望	問16
	進路	高校卒業後の希望進路	問17-18

表2 分析対象

	男子	女子	計
別学進学校	110	110	220
共学進学校	110	110	220
職業科高校	110	110	220
計	330	330	660

3. 分析対象・方法

白紙など半分以上の質問が無回答であった10部は分析の対象外とした。さらに、高校によって協力いただいた生徒数が異なっていたため、高校種別の回収数を考慮して、表2のように抽出した660部を分析の対象とした。

分析にはSPSSver.16を使用した。有意水準は5%とした。

4. 倫理的配慮

調査開始に先立ち、調査方法について女子栄養大学倫理審査委員会の審査を受け、承認された(承認番号72号)。承認された調査方法に従って調査を実施した。

III. 結 果

1. 回答者の背景(図1～5)

高校のタイプ別に、回答者の背景は、次のとおりであった。

(1) 別学進学校男子

在学している高校に、45.9%がとても満足、49.5%がまあまあ満足していて、満足度は高い。

男女平等について学ぶ機会は、「まったくない」が49.1%、「あまりない」が38.9%と、学ぶ機会が少ない者が多かった。

ほとんど(98.1%)が四年制大学への進学を希望していた。

将来は、結婚し職業を持ちながらパートナーと家事を分担する生活を考えている者(「分担型」)が最も多かったが、仕事中心の生活を考えている者(「仕事専念型」)が、ほかのタイプの高校生と比べると最も多かった。

家庭科で、育児の協力について学んだ者は少なく(19.4%)、仕事に関する問題を学んだことがある者は、わずかであった(男性の仕事に関する問題・女性の仕事に関する問題ともに6.5%)。

(2) 別学進学校女子

在学している高校に、61.5%がとても満足、35.8%がまあまあ満足していて、満足度は高い。

男女平等について学ぶ機会は、「ときどきある」が29.5%など、別学校の男子よりは多かった。

ほとんど(98.2%)が四年制大学への進学を希望していた。

将来は、「分担型」を考えている者が最も多かったが、結婚しようと思わない(「非婚型」)が、ほかのタイプの高校生と比べると最も多かった。

家庭科で女性の仕事に関する問題を学んだ者は86.4%と多かったが、男性の仕事に関する問題を学んだ者は、37.3%とあまり多くなかった。育児の協力や家事の協力について学んだ者は、かなり多かった。

(3) 共学進学校男子

在学している高校には、16.4%がとても満足、57.3%

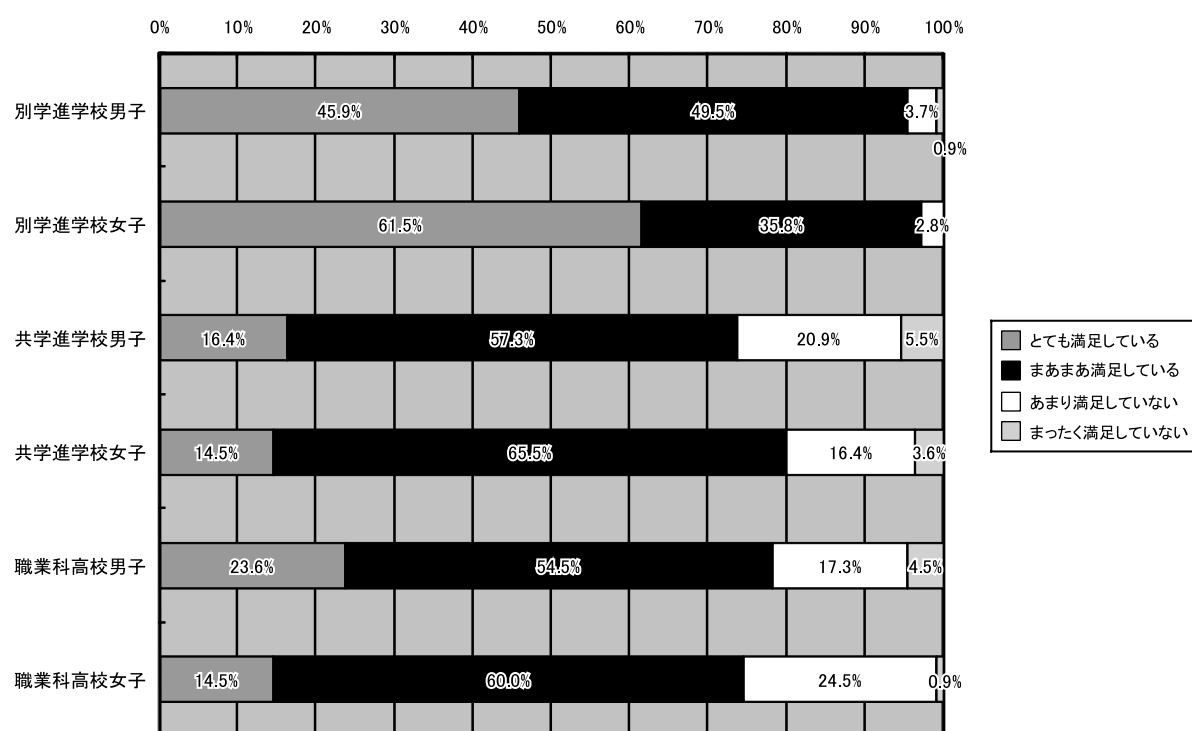


図1 高校に満足しているか(高校タイプ男女比較)

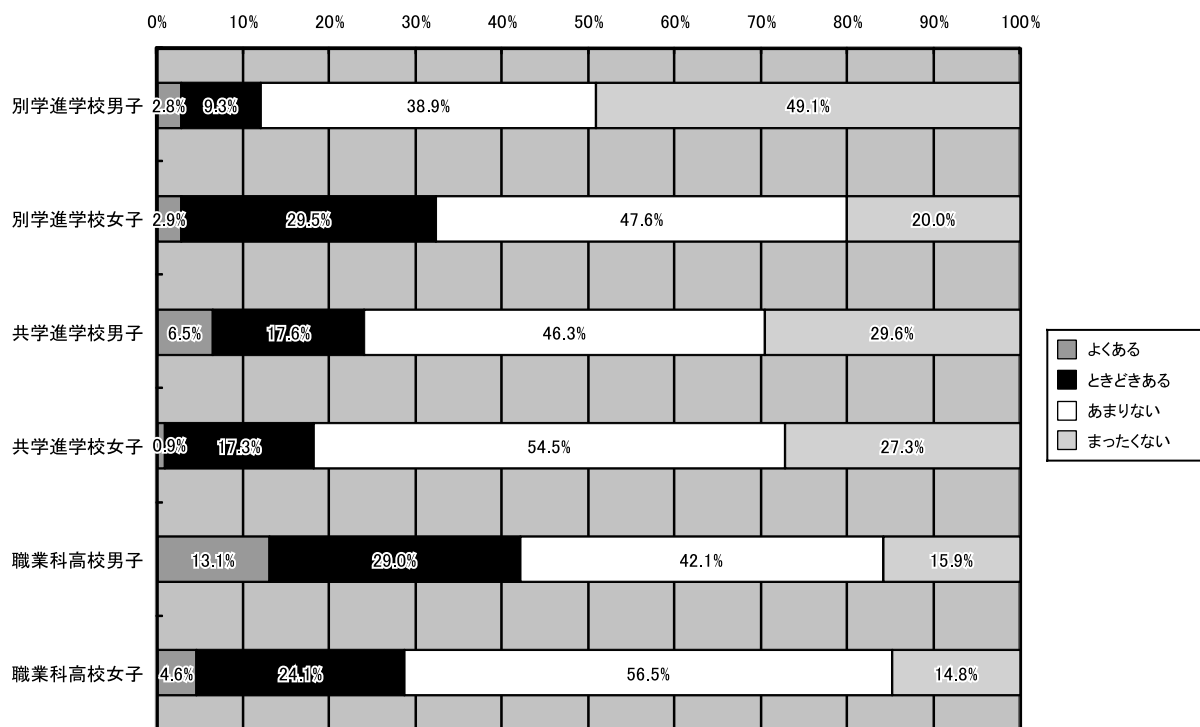


図2 男女平等を学ぶ機会

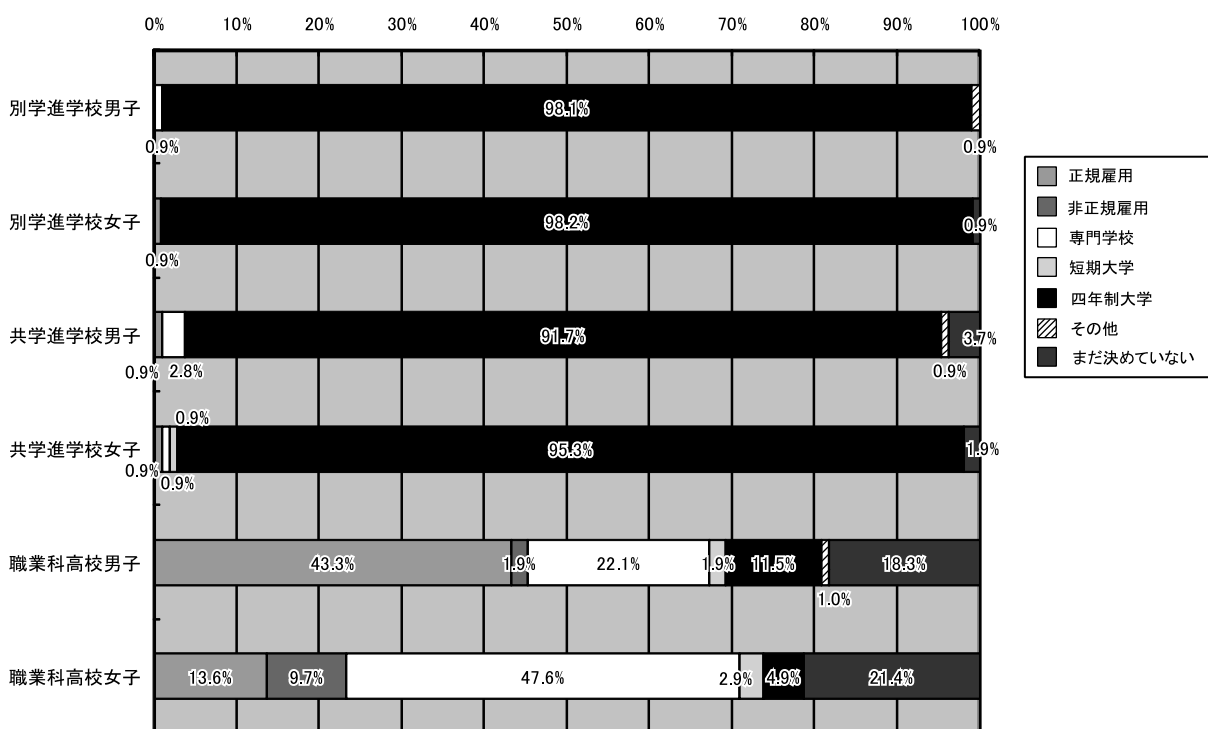


図3 高校卒業後の希望進路

がまあまあ満足しているが、あまり満足していない者が20.9%、まったく満足していない者も5.5%いる。

男女平等について学ぶ機会は、「あまりない」が46.3%、「まったくない」が29.6%と、学ぶ機会が少ない者が多かった。

大部分（91.7%）が四年制大学への進学を希望してい

るが、専門学校への進学を希望している者（2.8%）や進路をまだ決めていない者（3.7%）もいた。

将来は、「分担型」を考えている者が最も多かったが、「仕事専念型」や「わからない」との回答も1～2割程度あった。

家庭科で男性の仕事に関する問題を学んだのは62.8

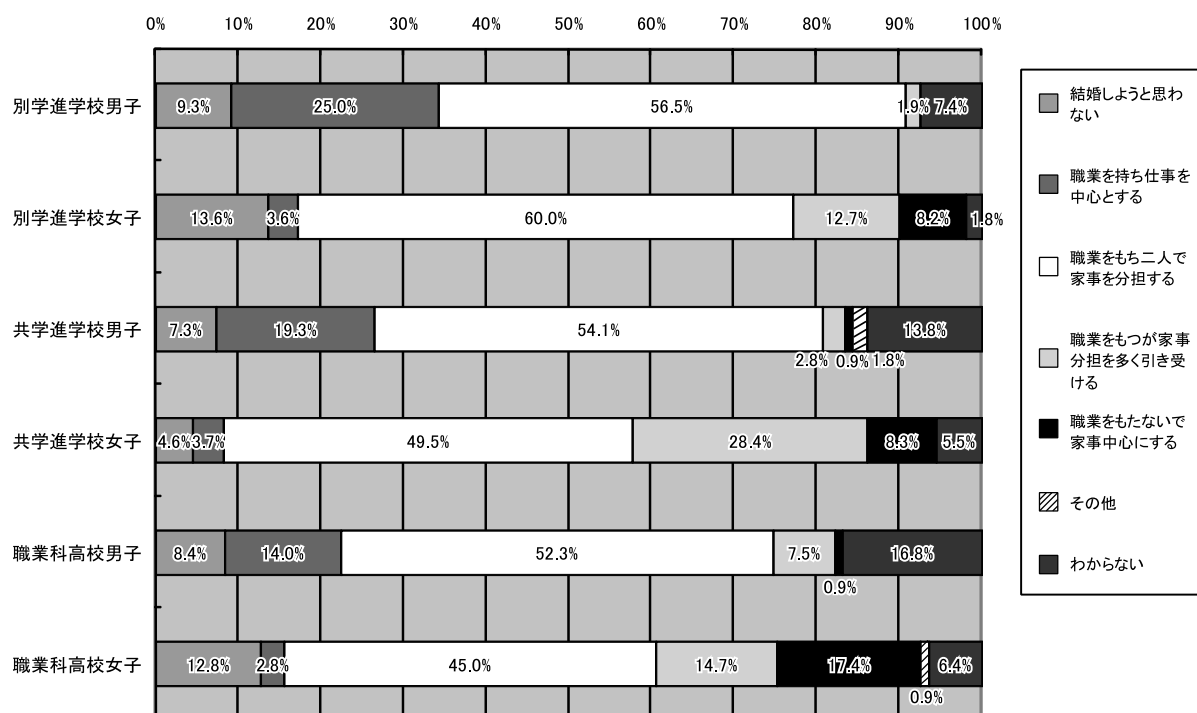


図4 結婚と結婚後の生活の希望

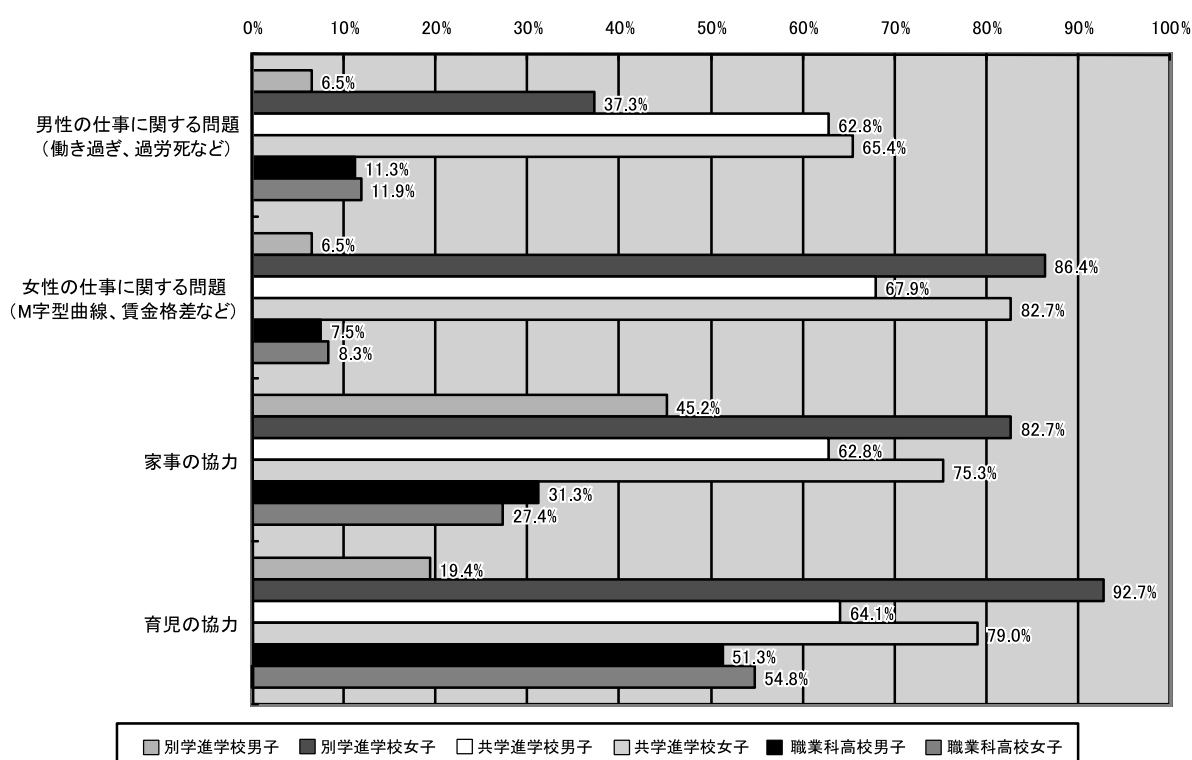


図5 家庭科の授業で学んだことのある内容

%, 女性の仕事に関する問題を学んだのは 67.9%と、男子の中では最も多かった。

(4) 共学進学校女子

在学している高校には、14.5%がとても満足、65.5%がまあまあ満足しているが、あまり満足していない者が16.4%, まったく満足していない者も 3.6%いる。

男女平等について学ぶ機会は、「あまりない」が 54.5%, 「まったくない」が 27.3%と、学ぶ機会が少ない者が多かった。

ほとんど (95.3%) が四年制大学への進学を希望していた。少数だが、まだ進路を決めていない者 (1.9%) や専門学校 (0.9%) や短大 (0.9%) への進学を希望して

いる者もいた。

将来は、「分担型」を考えている者が最も多かったが、職業を持ち家事分担を多く引き受ける「兼業主婦型」が、ほかのタイプの高校生と比べると最も多かった。

家庭科で、男性の仕事に関する問題や女性の仕事に関する問題、家事や育児の協力について、学んだ者はいずれも多く、バランスよく家庭科の学習を行っていることがうかがえた。

(5) 職業科高校男子

在学している高校には、23.6%がとても満足、54.5%がまあまあ満足しているが、あまり満足していない者が17.3%、まったく満足していない者も4.5%いる。

男女平等について学ぶ機会は、「よくある」が13.1%、「ときどきある」が29.0%などと、他のタイプの高校生と比べると、学ぶ機会が最も多かった。

正規雇用を希望している者が43.3%と最も多かった。専門学校への進学を希望している者が22.1%、四年制大学への進学を希望している者が11.5%いる。まだ進路を決めていない者も18.3%いた。

将来は、「分担型」を考えている者が最も多かったが、「仕事専念型」や「わからない」との回答も15%前後あった。

家庭科で、半数以上(51.3%)が育児の協力について学んでいたが、家事の協力は31.3%、男性の仕事に関する問題は11.3%、女性の仕事に関する問題は7.5%と少なかった。

(6) 職業科高校女子

在学している高校には、14.5%がとても満足、60.0%がまあまあ満足しているが、あまり満足していない者も24.5%いる。

男女平等について学ぶ機会は、「あまりない」が56.5%と最も多かったが、「ときどきある」が24.1%などと他のタイプの高校生と比べると職業科高校男子に次いで学ぶ機会が多かった。

専門学校への進学を希望している者が47.6%と最も多かった。正規雇用を希望している者は13.6%、アルバイトやパートなどの非正規雇用を希望している者が9.7%、四年制大学への進学を希望している者が4.9%、短大へ進学を希望している者が2.9%であった。まだ進路を決めていない者も21.4%いた。

将来は、「分担型」を考えている者が最も多かったが、職業をもたずに家事を引き受ける「専業主婦型」が、ほかのタイプの高校生と比べると最も多かった。

家庭科で、男性の仕事に関する問題を学んだのは11.9%、女性の仕事に関する問題は8.3%といずれも少なかった。家事の協力も27.4%と学んだ者は少なかった。

2. ジェンダー平等意識と将来観

(1) ジェンダー平等意識と将来観についての因子分析

表3のと通りのジェンダー平等に関わる意識と将来観27項目について、「非常にそう思う」・「どちらかといえ

表3 ジェンダー平等意識と将来観の調査項目

(1) 個人的な能力は男女の違いより個人差の方が大きい
(2) 男性は女性を守るべきだ
(3) 女性は体力・精神力の面で、向かない仕事もある
(4) 夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである
(5) 数学や理科は、女子より男子の方が得意だ
(6) 国語や英語は、男子よりも女子の方が得意だ
(7) 家庭科は、男子より女子の方が得意だ
(8) 体育は、女子より男子の方が得意だ
(9) 男性は人前で泣いたり、弱音をはくものではない
(10) デートの費用は男性が払うべきだ
(11) 子どもが三歳くらいまでは、母親は家にいる方がよい
(12) 女性は男性を立てた方がよい
(13) 今の自分の性に生まれてよかったと思う
(14) 女性は子どもを産めば自然に母性愛がわいてくる
(15) 大人になったら稼ぐのが当たり前だ
(16) 社会で自分の能力をためしたい
(17) 経済的に今よりも豊かな生活をしたい
(18) 愛する人と結ばれることが最も重要だ
(19) 社会のために役立つことをしたい
(20) 貧しくとも平穏に暮らしたい
(21) 社会で成功したい
(22) 人と競争するのはいやだ
(23) 結婚して幸せな家庭を築きたい
(24) 自分はフリーターになるかもしれない
(25) 努力はなるべくしたくない
(26) 将来、子どもをもって親になりたい
(27) 自分は将来の夢を実現できると思う

ばそう思う」・「どちらかといえばそう思わない」・「全くそう思わない」の4件法で尋ねた。

それらのジェンダー平等意識と将来観の特徴を総合的に把握するために、因子分析(一般化された最小2乗法)を行った。算出される因子間の相関の検討が必要だと考え、回転方法は、斜交回転(直接オブミン法)とした。ただし、フロア効果が認められた項目{(15)・(23)・(26)}と、十分な因子負荷量(0.4以上)を得られなかった項目{(1)・(3)・(13)・(20)・(22)・(27)}は、因子分析の対象から除外した。因子数は、スクリープロット〔初期解における固有値の減衰状況(第1因子から第6因子まで、4.61, 2.15, 1.52, 1.40, 1.02, 0.89)〕から判断し、4因子とした。また、因子分析の対象とした18項目でのクローンバックの α 係数は0.81であった。回転後の因子負荷量は、表4-1のとおりである。

第1因子は、受験教科に関わる男女差であることから、「文系/理系科目のジェンダー差意識」と考えた。第2因子は、家庭形成や受験外教科のジェンダー差であることから「性別役割分業観」と考えた。第3因子は、「社会的・経済的成功意欲」と考えた。第4因子は、努力はしたくない・フリーターになるかもしれないという項目

表 4-1 ジェンダー平等意識と将来観についての因子分析

	(第 1 因子) 文系／理系の ジェンダー差	(第 2 因子) 性別役割 分業観	(第 3 因子) 社会的・経済 的成功意欲	(第 4 因子) 降りズム 志向	共通性
(6) 国語や英語は、男子よりも女子の方が得意だ	0.936	0.000	-0.033	0.034	0.893
(5) 数学や理科は、女子より男子の方が得意だ	0.885	-0.013	-0.007	0.020	0.792
(2) 男性は女性を守るべきだ	-0.091	0.660	-0.075	-0.078	0.481
(4) 夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである	0.043	0.645	0.072	0.100	0.500
(12) 女性は男性を立てた方がよい	0.074	0.621	0.074	0.033	0.494
(9) 男性は人前で泣いたり、弱音をばくものではない	0.023	0.531	-0.064	0.138	0.455
(10) デートの費用は男性が払うべきだ	-0.026	0.509	-0.041	0.132	0.398
(11) 子どもが三歳くらいまでは、母親は家にいる方がよい	0.004	0.488	0.065	-0.076	0.290
(8) 体育は、女子より男子の方が得意だ	0.247	0.431	-0.113	0.072	0.511
(14) 女性は子どもを産めば自然に母性愛がわいてくる	0.096	0.422	0.027	-0.213	0.352
(18) 愛する人と結ばれることが最も重要だ	-0.025	0.422	-0.263	-0.029	0.391
(7) 家庭科は、男子より女子の方が得意だ	0.356	0.416	-0.026	0.072	0.523
(16) 社会で自分の能力をためしたい	0.082	-0.153	-0.705	-0.173	0.553
(21) 社会で成功したい	-0.009	0.052	-0.678	0.068	0.514
(19) 社会のために役立つことをしたい	0.057	0.036	-0.598	-0.276	0.539
(17) 経済的に今よりも豊かな生活をしたい	-0.036	0.101	-0.483	0.250	0.366
(25) 努力はなるべくしたくない	0.003	0.025	0.038	0.768	0.620
(24) 自分はフリーターになるかもしれない	0.063	-0.009	0.037	0.469	0.308
寄与率	19.4%	10.6%	8.7%	4.8%	

注) 因子分析：一般化された最小 2 乗法・直接オプミリン回転による。

表 4-2 因子相関行列

	(第 1 因子) 文系／理系 のジェン ダー差	(第 2 因子) 性別役割 分業観	(第 3 因子) 社会的・ 経済的 成功意欲	(第 4 因子) 降りズム 志向
(第 1 因子) 文系／理系 のジェン ダー差	1	0.421	-0.116	0.050
(第 2 因子) 性別役割 分業観		1	-0.256	0.124
(第 3 因子) 社会的・ 経済的 成功意欲			1	0.081
(第 4 因子) 降りズム 志向				1

を中心に構成されることから、正規職員になれず、下流層になるかもしれないという諦めであり、＜降りる＞ことで自己を肯定し、自己を充足させるメカニズム⁸⁾、いわゆる「オリズム」と考え、「降りズム志向」とした。因子間の相関は表 4-2 のとおりであり、第 1 因子と第 2 因子に中程度の相関 ($r=0.421$) が、第 2 因子と第 3 因子の弱い相関 ($r=-0.256$) が認められた。

(2) 因子得点の高校タイプ別比較

因子分析の結果から、第 4 因子「降りズム志向」を構成する 2 項目 {(25)・(26)} の因子負荷量に差があると考え、因子得点を算出して検討することにした。因子得点は回帰法によって算出した。

4 項目の因子得点の高校タイプ別平均値を、分散分析および多重比較法で検定したのが、表 5 である。なお、Levene 検定が 4 項目とも有意であったので、多重比較法はいずれも Games-Howell の検定を用いた。

「文系／理系のジェンダー差意識」の因子得点については、分散分析においても、多重比較法においても、有意差が認められなかった。

「性別役割分業観」の因子得点については、まず男女別に平均値を算出すると、男子平均値 -0.16 (SD 0.94)、女子平均値 0.15 (SD 0.87) であり、男子のほうが性別役割分業意識が強く、女子のほうが平等意識が強かった ($t(588)=4.08$ $p<0.001$)。さらに、男女合わせて学校タイプ別に算出すると、別学進学校 0.17 (SD 0.86)、共学進学校 0.07 (SD 0.80)、職業科高校 -0.25 (SD 1.03) であり、別学進学校は職業科高校より平等意識が強く ($t(377)=4.40$ $p<0.001$)、共学進学校も職業科高校より平等意識が強かった ($t(366)=3.39$ $p<0.001$)。また、別学進学校女子は、別学進学校男子、共学進学校男子、職業科高校男子、職業科高校女子より、有意に平等意識が強く、共学進学校女子は、職業科高校男子より、有意に平等意識が強かった (表 5)。

表5 因子1～4の因子得点の高校タイプ別比較

項 目	グループ	n	因子得点の 平均値	標準 偏差	分散分析				多重比較法 (Games-Howell) p 値					
					平均 平方 誤差	F 値	p 値	Levene 検定	比較対象					
									別学 進学校 男子	別学 進学校 女子	共学 進学校 男子	共学 進学校 女子	職業科 高校 男子	職業科 高校 女子
(因子得点1) 文系／理系 科目のジェ ンダー差意 識	別学進学校男子	94	0.00	1.13	0.92	1.68	p=0.137	p=0.009	—	p=0.769	p=0.990	p=0.990	p=0.991	p=0.969
	別学進学校女子	106	-0.19	0.88					—	p=0.264	p=0.943	p=0.943	p=0.269	p=0.151
	共学進学校男子	93	0.09	0.98					—	p=0.726	p>0.999	p>0.999	p>0.999	p>0.999
	共学進学校女子	102	-0.09	0.80					—	p=0.734	p=0.560	p=0.560	p=0.560	p=0.560
	職業科高校男子	97	0.09	1.00					—	p>0.999	p>0.999	p>0.999	p>0.999	p>0.999
	職業科高校女子	98	0.12	0.95					—	p>0.999	p>0.999	p>0.999	p>0.999	p>0.999
(因子得点2) 性別役割 分業観	別学進学校男子	94	-0.01	0.85	0.80	8.06	p<0.001	p=0.002	—	p=0.042	p=0.995	p=0.388	p=0.107	p=0.964
	別学進学校女子	106	0.34	0.83					—	p=0.009	p=0.822	p=0.822	p<0.001	p=0.006
	共学進学校男子	93	-0.08	0.86					—	p=0.134	p=0.290	p=0.290	p>0.999	p>0.999
	共学進学校女子	102	0.21	0.72					—	p<0.001	p=0.086	p=0.086	p=0.086	p=0.086
	職業科高校男子	97	-0.37	1.07					—	p=0.525	p=0.525	p=0.525	p=0.525	p=0.525
	職業科高校女子	98	-0.12	0.98					—	p=0.525	p=0.525	p=0.525	p=0.525	p=0.525
(因子得点3) 社会的・ 経済的 成功意欲	別学進学校男子	94	0.43	0.70	0.73	7.79	p<0.001	p<0.001	—	p=0.007	p=0.002	p<0.001	p=0.035	p<0.001
	別学進学校女子	106	0.07	0.77					—	p=0.926	p=0.201	p=0.201	p>0.999	p=0.035
	共学進学校男子	93	-0.06	0.96					—	p=0.957	p=0.995	p=0.995	p=0.523	p=0.523
	共学進学校女子	102	-0.16	0.62					—	p=0.732	p=0.833	p=0.833	p=0.833	p=0.833
	職業科高校男子	97	0.02	1.12					—	p=0.270	p=0.270	p=0.270	p=0.270	p=0.270
	職業科高校女子	98	-0.29	0.89					—	p=0.270	p=0.270	p=0.270	p=0.270	p=0.270
(因子得点4) 降りズム 志向	別学進学校男子	94	0.07	0.86	0.63	15.52	p<0.001	p<0.001	—	p=0.048	p=0.002	p=0.527	p=0.035	p=0.751
	別学進学校女子	106	0.40	0.68					—	p<0.001	p=0.740	p=0.740	p<0.001	p<0.001
	共学進学校男子	93	-0.39	0.74					—	p<0.001	p=0.994	p=0.994	p=0.100	p=0.100
	共学進学校女子	102	0.26	0.68					—	p<0.001	p=0.014	p=0.014	p=0.014	p=0.014
	職業科高校男子	97	-0.32	0.95					—	p=0.481	p=0.481	p=0.481	p=0.481	p=0.481
	職業科高校女子	98	-0.09	0.83					—	p=0.481	p=0.481	p=0.481	p=0.481	p=0.481

※分散分析の自由度は
各項目とも (5, 584)

(網掛け) …多重比較法において有意差が認められた検定結果

表6 因子得点平均値のグルーピング

(因子得点1) 文系／理系科目 のジェンダー差 意識	(因子得点2) 性別役割 分業観	(因子得点3) 社会的・経済的 成功意欲	(因子得点4) 降りズム 志向
別学進学校女子	職業科高校男子	別学進学校男子	共学進学校男子
共学進学校女子	職業科高校女子	別学進学校女子	職業科高校男子
別学進学校男子	共学進学校男子	職業科高校男子	職業科高校女子
職業科高校男子	別学進学校男子	共学進学校男子	別学進学校男子
共学進学校男子	共学進学校女子	共学進学校女子	共学進学校女子
職業科高校女子	別学進学校女子	職業科高校女子	別学進学校女子

(注) □は統計的有意差によるグルーピングを示している。ただし、
因子得点の高い⇨低いの程度は、各因子得点ごとに異なる。

「社会的・経済的成功意欲」は、女子（平均値 -0.12, SD 0.78）より男子（平均値 0.13, SD 0.96）のほうが有

意に強かった ($t(544)=3.49$ $p<0.001$)。また、別学進学校男子が、他の5タイプよりも有意に強く、別学進学校女子は職業科高校女子よりも有意に強かった (表5)。

「降りズム志向」については、女子（平均値 0.20, SD 0.76）より男子（平均値 -0.21, SD 0.87）のほうが有意に強かった ($t(561)=6.02$ $p<0.001$)。また、共学進学校男子が、別学進学校女子、共学進学校女子、別学進学校男子より、有意に強く、職業科高校男子も、別学進学校女子、共学進学校女子、別学進学校男子より、有意に強かった。さらに、職業科高校女子が、別学進学校女子、共学進学校女子より有意に強く、別学進学校男子が別学進学校女子よりも有意に強かった (表5)。

高校タイプ別に因子得点の平均値をグルーピングして整理したのが、表6である。別学進学校男子の「社会的・経済的成功意欲」は群を抜いて高いことや、共学進学校男子と職業科高校男子の「降りズム志向」が別学進学校女子・共学進学校女子に比べて非常に強いことがわかる。

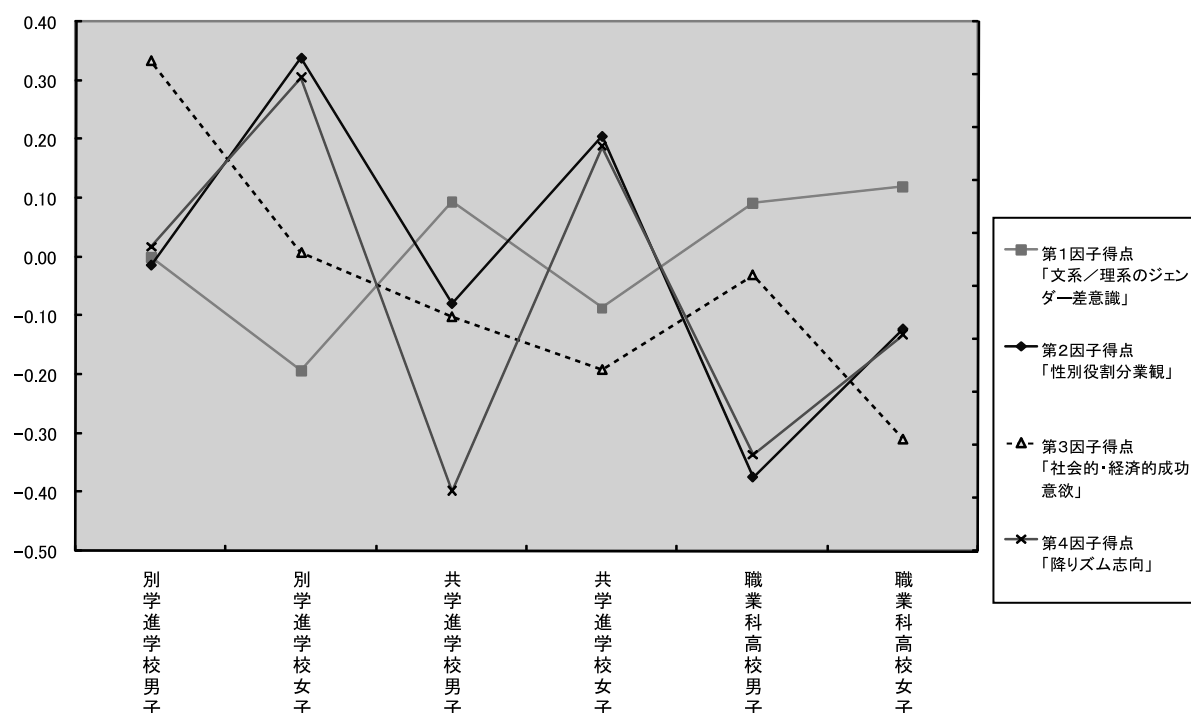


図6 因子得点の高校タイプ別比較

また、図6は、因子得点の高校タイプ別平均値をグラフ化したものである。共学進学校男子において「降リズム志向」がかなり強いものの、総じて「性別役割分業観」と「降リズム志向」の得点傾向が非常に相似していた。

IV. 考 察

1. ジェンダー平等意識

第2因子得点の結果から、男子より女子の方が、ジェンダー平等意識が高いと、本調査でも結論付けることができる。ここから、本研究の結果が荒井ら⁹⁾や佐々木ら¹⁰⁾の調査結果とも一致していたと言える。また、これは本研究の併存的妥当性の一部を示しうるものであると考えられる。

ただし、別学・共学進学校の方が職業科高校より、ジェンダー平等意識が高いという本調査の結果は、青森県内の専門高校・進学校・進学者のあまり多くない普通科高校の3校を比較した上で、高校生のジェンダー観には学校間の有意差はないとした佐々木ら¹¹⁾の2002年の調査結果と相違が見られた。これは、調査項目が全く同じではないことや、調査時期や地域が異なることなど、さまざまな原因が考えられる。渋谷らが1998年に埼玉県と東京都の公立高校7校の2～3年生を対象に行った調査では「普通科より専門学科の生徒の方が、進学者より進学以外の者の方が、旧来のジェンダー観を保持している」という調査結果が示されており¹²⁾、本調査の結果でも同様であったことから、佐々木らの調査との相違は、調査地域の違いによる影響が最も大きいと考えられるが、この点に関わる詳細な検討は今後の課題としたい。

また、本調査では、男女平等について学ぶ機会が最も多かったのが職業科高校男子、次いで職業科高校女子であったのにもかかわらず、性別役割分業意識が最も強いのが職業科高校男子、次いで職業科高校女子であった。これは、男女平等について学ぶと、かえって性別役割分業意識が強まるということではないと考えられる。というのも、性別役割分業意識の強い高校生と接している、職業科高校の教員の方が、男女平等について教える必要性を強く感じ、さらに、大学受験指導に時間をとられない分、その機会にも恵まれるからだと考えられる。ところが、本調査の結果で示されたように、その男女平等に関する教育が、職業科高校生のジェンダー意識を根本的に変容させるには至っていないようである。P. Willsの『ハマータウンの野郎ども』では、中等学校卒業後すぐ就職する労働者階級の生徒たちは、反学校文化の一つとして、家父長制的な性別役割観や男尊女卑の価値観との結びつきが強いことが指摘されている¹³⁾。逆に、別学であれ、共学であれ、進学校へ入学できる学力をもった子どもたちは、男女は平等であるという現在の社会情勢ではごく当然な価値観、ある意味では、現在の社会では男女平等を志向するのが「正解だ」という価値観を、すでに内在化させていると考えられる。つまり、今後、インタビュー調査などの質的調査を行い、進学校におけるジェンダー平等意識の高さが、表面的な「正解」を答えたもののなのか、自らの志向する生き方をありのままに反映させた回答なのかを、明らかにしていく必要があると考える。

2. 将来観

若者の雇用環境が依然として厳しい中で、正規雇用と非正規雇用の格差がクローズアップされている。加えて、近年、「引きこもり」や「ニート」など、自立しない／できない若者への注目が高まってきた。そして、その多くは男子である。

池谷は、産業構造が重労働から情報・サービス労働へ変化したことによって、そこで求められる能力やマスキュリニティそのものが変化したことや、フェミニズムの取り組みによって一定の男女平等政策が進められてきた中で、女子がとりわけ学校で「差別」されることなく「対等」に男子と渡り合い、成績の上でも男子に追いついてきたことを背景に、先進国ではますます男子・男性が「問題」となっていると指摘し、従来のフォーディズム的経営（新規学卒雇用、終身雇用と年功序列）から移行したポストフォーディズム的経営の下では、＜卒業→就職→結婚→退職＞というライフ・ステージを描くことができなくなりつつあると述べる¹⁴⁾。本調査の男子の「降りズム志向」の高さは、そういった男子の不安定さの現われと考えることができる。

本調査では、共学進学校男子の「降りズム志向」が最も強かった。雇用環境が特に厳しい職業科高校において、将来フリーターになるかもしれない・なるべく努力はしたくないという「降りズム志向」が強いことは、先行研究¹⁵⁾から考えても、想像に難くない。「降りズム志向」が進学校の男子にまで波及していることは、先行研究からは予見できなかった、特筆すべき点であると考えられる。共学進学校男子において最も強かったのは、次のような背景があると考えられる。埼玉県内の県立高校の場合、共学進学校の多くは、その地域の別学進学校に次ぐ、ナンバーツーの進学校として位置づけられており、共学進学校男子の「降りズム志向」は、別学進学校男子が志望するようないわゆる超難関大学への諦めの気持ちとも関連していると考えられる。さらに、本調査対象の共学進学校においては、家庭科などを通して、男性や女性の労働問題について学ぶ機会があったということが関係していると考えられる。グローバル経済の下で日本の若者はますます貧困化しており、正規雇用の夫と専業主婦の妻とその子どもという家族モデル＜男性稼ぎ主モデル（male bread winner）＞だけに頼る、これまでの社会制度がいずれ制度疲労に陥る可能性がかなり高いであろうこと¹⁶⁾は、家庭科教員のみならず、多くの教育関係者が想定していることだと考える。つまり、共学進学校男子の「降りズム志向」が強いというのは、終身雇用と年功序列を伴った＜卒業→就職→結婚→退職＞という従来どおりのライフ・ステージを進めるのは、超難関大学へ進学できるようなごく一部のエリートにますます限られてくるということを理解し、従来どおりではない多様な生き方を模索していく必要性に気づいているということであるとも考えられる。

逆に、別学進学校男子は「社会的・経済的成功意欲」

が群を抜いて強かった。社会的・経済的成功を従来型のライフ・ステージにおいて達成できる可能性が高いことは、別学進学校男子自身がはっきりと自覚しているかどうかは別にしても、彼らを取り巻く大人たち（教員や保護者）は理解しており、かつ、それを期待していると思われる。そのため、別学進学校男子にとっては、男女平等教育や男性や女性の労働問題について学ぶことの意義は相対的に低くなり、そのような学びの機会も少なくなると考えられる。

一方、別学進学校女子や共学進学校女子の「降りズム志向」は、性別役割分業意識の高さと連動するかのようには、弱かった。これは「女は家庭」という性別役割分業から脱却し、自立した女性像を描きやすい進学校女子の特徴であると言えるだろう。正規雇用の夫と専業主婦の妻（とその子ども）という従来型の家族モデルを脱却するという点で重要となる正規雇用は、現在の経済不況の下では、もちろん女子も得にくい。しかし、自らが安定した正規雇用を得られなくても、安定した正規雇用の男性と結婚し、経済的には安定した生活を手に入れるというライフ・ステージもまだありえるので、男子に比べ選択肢が多く、チャレンジ精神が育まれやすい環境で育っているということも影響していると言えよう。

他方、職業科高校女子は、「専業主婦志向」が最も強く、共学進学校男子や職業科高校男子ほどでないものの、別学進学校女子や共学進学校女子より「降りズム志向」がやや強く、「社会的・経済的成功意欲」は最も低かった。つまり、自立した女性像も描きにくく、社会的・経済的成功も多くは望めず、ある者は専門学校への進学に希望を求め、ある者は不安定で流動的な非正規雇用を続け、ある者は結婚や専業主婦に活路を見いだす、という高校卒業後の将来像を描いていると考えられる。

また、本調査では、「性別役割分業観」と「降りズム志向」の因子得点の高校タイプ別の平均値の得点傾向が（共学進学校男子を除いて）連動するかのようには相似していた。両因子の相関係数は $r=0.12$ とほとんど相関がなく、因子の意味が重複しているわけではなかった。ただ、両因子には、従来型のライフ・ステージ、つまり、男性は終身雇用と年功序列を伴った＜卒業→就職→結婚→退職＞、女性はそういった男性との結婚による専業主婦（あるいは兼業主婦）化、を志向するのか、あるいは、そうではない多様な生き方を模索するのか、という点が関連していると考えられる。共学進学校男子は、「性別役割分業意識」はほどほどで、従来型のライフ・ステージを進める可能性が職業科の高校生よりは高いものの、共学の家庭科の学習や男女共学によって、そうではない別のライフ・ステージの可能性を感じ取っているために、「降りズム志向」が強く、「性別役割分業意識」の因子得点との乖離が見られたと考えられる。

V. まとめと今後の課題

高校生のジェンダー平等意識と将来観を、共学進学校・

別学進学校・職業科高校の比較によって把握し、課題を見出すことを目的に、埼玉県の県立高校6校（男子校（進学校）1校、女子校（進学校）1校、共学校（進学校）2校、共学職業科高校2校）の高校生を対象に自記式質問紙調査を実施した。ジェンダー平等に関わる意識と将来観について、因子分析を行い、「文系／理系科目のジェンダー差意識」「性別役割分業意識」「社会的・経済的成功意欲」「降りズム志向」の4因子を抽出した。男女別・高校タイプ別に、次のような特徴があった。

別学進学校男子は、「性別役割分業意識」はほぼほぼで、「社会的・経済的成功意欲」がかなり高く、比較的多くが従来型のライフ・ステージを志向し、それを迎える可能性も高いため、「降りズム志向」が弱かった。

別学進学校女子・共学進学校女子は自立した女性という将来像が描きやすく、「性別役割分業意識」も、「降りズム志向」も弱かった。

共学進学校男子は、「性別役割分業意識」はほぼほぼであるが、新たなライフ・ステージの可能性を感じ取っているために、従来型のライフ・ステージからの「降りズム志向」が高かった。

職業科高校男子は、「性別役割分業意識」が高く、「社会的・経済的成功意欲」も高めで従来型のライフ・ステージを志向しているものの、雇用環境の悪さからそれを迎えず、降りなければならぬという「降りズム志向」が強かった。

職業科高校女子は、自立した女性像が描きにくく、ここからの「降りズム志向」がやや強く、「性別役割分業意識」もやや強かった。

今後は、上記のような特徴が学校空間において、どのように構築されているのかを、学校参与観察調査などを通して、より詳細に明らかにしていく必要があると考える。例えば、家庭科などにおいて、ライフ・ステージなどの生き方に関わる問題がどのように語られ、生徒がそれをどんな雰囲気の中でどう感じているのかを、共学進学校・別学進学校・職業科高校を比較・検討することによって、それぞれの高校のタイプに合った内容のジェンダー平等教育を構築することも可能になると考える。

謝 辞

本研究の主旨を理解し、ご協力いただいた高校教員のみなさま、ご回答いただいた高校生のみなさまに心から感謝いたします。

本研究は、平成21～23年度日本学術振興会科学研究費補助金「子どものジェンダー平等意識形成と学校に関する総合的研究」（課題番号21330183）の一部として行われたものである。

参 考 文 献

- 1) 橋本紀子：日本国憲法と教育基本法下のジェンダー平等教育 学校教育を中心に。ジェンダー視点から戦後史を読む（米田佐代子・大日方純夫・山科三郎 編），p47-77，大月書店，東京（2009）
- 2) 同上
- 3) 荒井紀子，鶴田敦子：男女共学家庭科の履修と高校生の意識（第1報）ジェンダー観をめぐって。日本家庭科教育学会誌，39(2)，39-46（1996）
- 4) 佐々木多津子，日景弥生：高校生を対象としたジェンダー学習構築のための調査。弘前大学教育学部紀要，(98)，75-81（2007）
- 5) 中西新太郎，高山智樹 編：ノンエリート青年の社会空間 働くこと，生きること，「大人になる」ということ。大月書店，東京（2009）
- 6) 乾 彰夫：若者たちの労働市場のいまー「学校から仕事へ」の移行過程変容の性格と課題。揺らぐ＜学校から仕事へ＞労働市場の変容と10代（竹内常一，高生研 編），p12-34，青木書店，東京（2002）
- 7) 佐藤和夫（研究代表者）：男女共同参画社会における男女共学化，共修化の研究 2003年～2005年度科学研究費補助金研究成果報告書，p31-124，千葉大学教育学部哲学・倫理学研究室，千葉（2006）
- 8) 荻谷剛彦：階層化日本と教育危機。有信堂，東京（2001）
- 9) 3) と同じ
- 10) 4) と同じ
- 11) 同上
- 12) 渋谷美穂，橋本紀子：高校生自己肯定感形成におけるジェンダー観の影響。女子栄養大学栄養科学研究所年報，(8)，71-90（2000）
- 13) 熊沢 誠，山田 潤 訳：ハマータウンの野郎ども（ちくま学芸文庫）。筑摩書房，東京（1996）；Learning to Labour（Paul Willis），(1977)
- 14) 池谷壽夫：今なぜ男性が「問題」なのか？ー男性のジェンダーとセクシュアリティをめぐって。ジェンダー概念がひらく視界（唯物論研究協会 編），唯物論研究年誌，(11)，139-168（2006）
- 15) 12) と同じ
- 16) 藤村正之：若者世代の「男らしさ」とその未来。男性史3「男らしさ」の現代史（阿部恒久，大日方純夫，天野正子 編），p191-227，日本経済評論社，東京（2006）

